〔資料紹介〕尾崎翠によるポー略伝

森澤夕子

一、はじめに

現在、尾崎翠の全集は創樹社版①、筑摩書房版②の二種類が刊行されている。創樹社版からおよそ二十年を経て筑摩書房版の全集が刊行された際には、映画用シナリオや少女小説などの多数の未発表原稿が収録されたことが話題となった。また近年、鳥取で行われている「尾崎翠フォーラム」でも全集未収録の作品が複数紹介されている。③このように尾崎翠のテキストについては未整備の部分があり、今回紹介する資料も全集には収録されていないものの一つである。

二、資料について

尾崎翠はエドガー・アラン・ポーの「モレラ」の翻訳を「女人芸術」昭和五（一九三〇）年新春号に発表している。「翻訳特集」と題されたこの号には、「モレラ」を含め二十編の翻訳作品が掲載されている。収められている作品は、軽い読み物風のものからローザ・ルクセンブルクの書簡まで多岐に渡り、翻訳者の顔ぶれも多彩である。同時にこの号は、同誌が半年前から公募していた「全女性進出行進曲」の当選歌詞を発表した号でもあり、この雑誌が徐々に政治的な色彩を強めていくことを考え合わせると興味深い。

ところで「翻訳特集」の末尾には、「原作者略伝」の一編として次のような文章が収録されている。

> P　アメリカの人。詩人にして小説家。一八〇九年ボストンに貧しき旅役者の子として生れ、――四九年バルテイモアに没す。幼にして両親を失ひ、リツチモンドのアラン家に養はる。

ヴァアジニア大学の学生生活を賭博にて失敗、後軍籍に投じ士官学校に入学せしも、これ亦性情に適せざるの故を以て放擲す。後雑誌記者となりて諸種の作品を発表し、漸次文壇的地位を得。我意強くして意志弱く飲酒、病気、不如意の生涯なり。

作家として彼を簡単にいへば、「時代的傾向」に対しては純遊離者。「人生の再現」に対しては図案化者。――自然主義の世界に於ては坐るべき半分の椅子なく、仏蘭西象徴派中に於ては王座と家族的肘掛椅子を恭呈せられし人。（尾崎）

ポーは本国のアメリカにおいてよりも、フランスや日本で愛された作家であり、その生涯や文学については当時の文学事典にも多数取り上げられている。尾崎翠によるポー略伝の前半部は、こうした書物に紹介されているポーの生涯を要領よくまとめたものと言って良い。一方、後半部の作家としてのポーを紹介した文章は特徴的である。前半部に比べ、ユーモラスで味があり、いかにも尾崎翠らしい文章だと思われるのではないだろうか。

この後半部の文章の一部には典拠が認められる。「早稲田文学」明治四十〇（一九〇七）年五月号で、岩野泡鳴が「ゴレンは渠（ポー・引用者注）を称して、『仏蘭西表象派中で、渠が本国では持たなかつた王座と家族的肘掛倚子（ママ）とを与へられた者』と云つた。」と書いているのである。④しかし管見によると「『時代的傾向』に対しては純遊離者。『人生の再現』に対しては図案化者。」という表現は他の書物には見当たらず、これは尾崎翠独自のポー解釈であると考えられる。

三、おわりに

尾崎翠の作品世界は、一見した所ポーの作品世界とは結びつかないように思われる。しかし、二人の作家は「自然主義の世界に於ては坐るべき半分の椅子なく」、「『時代的傾向』に対しては純遊離者」であったという点では共通していると言えるだろう。そしてこの短い略伝からでも、「現在の日本文学の悲哀は、残骸となつた自然主義の固守である」⑤と嘆いた尾崎翠の、ポーに対する敬愛の念は、我々に伝わってくるのである。

注

① 稲垣眞美編『尾崎翠全集』（昭和五十四年十二月五日、創樹社）

② 稲垣眞美編『定本尾崎翠全集』（平成十年九月十五日～平成十年十月十五日、筑摩書房）

③ 石原深予「全集未収録の尾崎翠新資料」（『尾崎翠フォーラムin鳥取２００３報告集』所

収、平成十五年十二月一日）

④　また、岩野泡鳴はこれとほぼ同じ文章を、「文章世界」明治四十一年四月の増刊号「近代三十六文豪」に発表している。

⑤　前掲③中の尾崎翠「現文壇の中心勢力に就いて」（「若草」昭和二年九月号）より引用。

〔付記〕引用に際しては、原則として旧漢字は新漢字に改めた。